

## 新規就農トークラリ-2016開催しました。

開催日 平成28年8月10日



### 情勢報告

全国農業会議所 全国新規就農相談センター 黒谷所長

現在の海外情勢として、年齢構成が逆ピラミッドとなっている中国は一人っ子政策をやめたが今後20～30年後には人手不足になり、今後インドが経済大国になるといわれている。

国内では、全国の求人倍率が1963年以来1.37倍と24年6か月ぶりに高い水準で雇用状況は良くなっている。北海道は、農林漁の1か月あたりの給与は17万円、事務職は15万円との統計が出ているが、ホワイトカラー的な事務系が人気で、農業分野は人手不足が続いている。しかし、新規自営就農者は増加傾向で、国の青年就農給付金の効果が大いにあると思われるが、農業の継続率があまり良くない。給付金については5年経過し見直すことになっている。今後は、ベトナム人等をはじめ外国の労働者が増える傾向が考えられる。

今後は、TPPのこともあるが海外で稼ぐ事が重要（グローバル化）。自営就農は増えているが、雇用就農した後に独立させて生産物をその法人が販売していくようなこと（グローバル化）を進めている法人が増えてきている。

今後は、高齢化が進んでいくことに伴い後継者のいない農家は倉庫や農業機械があり、それを継承してほしい農家が益々多くなる傾向で、宮城県、長野県は今後対策に力を入れていく予定で、農大生などで就農したい方に勧めていくように取り組みをしたいと考えている。

農業を始めるにあたっては生活を安定させることが重要。新規就農者の23%程度しか安定的な農業を行っていない状況で、売上高が年間500万円以上は必要。

また、新規就農にあたって一番のネックは農地の確保が重要で、これにより就農できない場合も多い。農業は、今後5年で大きく変わってくると思われるが、人手不足も含め持続的な農業経営が可能となるよう全国新規就農相談センターも方策を検討していく。



### 農地担い手対策課 中山チーフ

新規就農者は5年間で毎年200人程度。県外就農者はその内10%程度、雇用就農される方が増えてきていて、現在30%程度となっている。新規就農者の平均年齢は33歳、作物は施設野菜が50%で一番多く、園芸全体では80%となっている。その中で1～2年間研修をされてから就農される方が多い。就農1年目の作付面積は、施設野菜では10～20aで年齢層も幅広い。露地の面積は思ったよりは少ない面積で始めている（20～30a）。

#### \*農業を始めるにあたっての問題点

- ・農地の確保・資金の確保・農業技術の習得

#### \*始めた後の課題

- ・収益の向上・技術の向上・労働力の不足

#### \*就農5年目までの販売額

- ・果菜類は1.5万円/坪、450万円/10a ニラなどは1万円/坪
- ・所得250万円を目指す。

#### \*産地提案型の説明

産地の方について、農業未経験者の方は農業担い手育成センターに行ってもらいが、青年就農給付金（準備型）を受給するのは受け入れ農家が決まってからとなる。遡って支給はできる。就農が目的ではなく就農5年間は継続してもらえるように指導（フォローアップ）していくことが大事。

## 新規就農者確保対策の新たな動きについて



「日本一の青果ユズ産地に向けて」 (公財) 三原村農業公社 高添専務

現在、産地計画として三原村農業公社が代行してユズ栽培を行っている。

生産量の増加の課題はユズ農家の問題を解決することが大切で、草刈りは一般的には刈り払い機を使用しますが、労力の減少に乗用の草刈機で行うため10aあたり通常は80本の植付を行います。三原村では平地の農地に40本と少なくしています。そして、2年間程度研修を受けていただいた方に家族人数に合わせたユズ農地を提供し、5年後250万円の所得を目指していただきます。また、補助金を活用して出荷施設を建設し、今年10月より搾汁ができるようになりますが、併せて所得の向上を図るために自動選果機も導入し、選別の向上を目指して企業と連携もしていく予定です。

移住者の受け入れには三原村が空き家を借り上げ、10年間移住者に提供。研修中は新たに建設したシェアハウスを利用していただきます(7名収容可能)。

ユズの栽培面積は21年度には8haであったが、28年度は48haまで増えていきます。また、22年度の公社職員は6名、28年度には27名で21名の増加、今後も増加していく予定です。



「大豊町立山村農業実践センターの取り組みについて」

大豊町産業建設課 美濃課長補佐

研修には、寮を完備し研修しやすい施設となっている(全6部屋)。雇用就農も含めた新規

就農に向けた研修体制。受入農家は2年間のコースで現在2名の方が研修しています。研修コースとしては慣行栽培コース（三色ピーマン、ミニトマト）、有機栽培コース（ミニトマト、露地ショウガ、ハウレンソウ）、その他、ユズ60haですが高齢化により果汁のみとなっています。ゼンマイも高齢化問題が顕著です。碁石茶はテレビで人気が出て生産が追い付かない状態。現在は7組16名の方が就農しています。研修の申込は大豊町のHP、山村農業実践センターHP、大豊町に直接してください。



#### 「新規就農トータルサポートについて」 安芸市農林課 宇根係長

主な品目は、施設ナス、中山間ではユズ、いずれも県下の生産量となっていて、ナスは全国2位となっている。

高齢化、耕作放棄地の増加産量の減少のため新規就農に力を入れている。相談から就農までトータルでサポートしている。

情報発信のため、高知大学、愛媛大学や農育センターでの研修生に説明。昨日、農業大学校に行ってきた。

来年度、安芸市で一泊の農業体験をやりたいと計画している。アグリード土佐あき等。今まで、20名が研修した。現在6名が参加、研修後9名が安芸で就農した。受入農家は20件ある。研修後のハウスについては中古ハウス、サポートハウス（安芸市、JA）で実践した後、JAレンタルハウスを建てる。月に1回担い手支援チームが巡回をして現状の問題についてサポートする。レンタルハウスの補助率は80%と高めに設定していて負担率は少なくなっている。農地、中古ハウスの問題はJA研究会での聞き取りや、人・農地プラン懇談会で1200人にアンケートを実施（270名の回答、9人が貸してもよいと回答）、認定農業者のフォローアップ時に聞き取り調査を行っている。

今後2～3年後には、JA園芸研究会等の農家が就農相談会に行き実際に新規就農者を確保していくようなことを行いたいと考えている。



### 「新規就農者確保対策について」 土佐町産業振興課 吉田主幹

新規就農者確保に向けて新・農業人フェアに参加している。多い時で20名の相談を受けている。27年度は、参加者の中から1名の方が移住され、現在2名の方から研修・移住相談を受けている。25年度にJA出資型農業法人(株)れいほく未来、26年度には土佐赤牛の経営者の川井さんを受け入れ機関として認定。研修生の受入れやインターンシップ事業を行っている。25年度からインターンシップ事業を行っていた(株)FPIおむすびーズと27年度より委託契約をして県内外から農業体験の受入を行っている。インターンシップの参加者が青年就農給付金(準備型)と新規就農推進事業を活用し(株)れいほく未来で研修中。新・農業人フェア等で移住相談があった際にはインターンシップ事業を活用し土佐町で暮らし農業体験をしてもらっている。時期が合わなかった場合は研修受入農家に相談し、短期研修を行っていて、農地の紹介とともに移住支援担当と連携し住宅の確保に努めている。



### 「JA高知春野キュウリ部会の新規就農者確保に向けた取り組み」

JA高知春野 長崎係長

春野町はJA春野町が中心となって高知市等の協力のもと産地提案を行っている。

管内では現在200名くらいでキュウリを栽培(50ha)しているが、アンケートを実施したところ、10年後には55名が辞めるとの回答があったので、後継者を確保して



いくことが重要。春野でキュウリの新規就農してもらえる方は1年間農家で研修を受けていただくような形でやっている。キュウリ部会で9名の方が指導農業士となっていて、現在、4名の方が研修を終えて就農している。春野のキュウリ生産量は県下で1番で、出荷施設も西日本一と言われている選果機を導入して、キュウリを持ち込んでもらったら機械で荷造りをしている。9月～10月にキュウリの新規就農者の面談をしているが、未経験の方には農育センターで研修を受けてもらっている。研修中に1週間程度農家研修を受けてもらって農家とのマッチングを行っている。準備型は最長2年間まで給付してもらえるが、春野では1年間研修した後就農してもらっている。受入農家が2年間も受け入れるのは大変とのこと。8月スタート、翌年7月で終わるパターンで行う。高知市でもサポートハウスを建ててもらいたいが、むずかしいので空きハウスの確保に力を入れている。春野では毎年2名を目標としている。



### 「移住・交流コンシェルジュの取り組みについて」

移住・交流コンシェルジュ 安岡チーフ

移住希望者に対して仕事、地域の情報をワンストップ窓口で受けられるポジションとなっている。平成22年度から3名体制で活動を開始、24年度から4名で行っていて、平日のみの対応でしたが、平成24年度から高知駅前のJRのとさテラスで365日対応ができるようになった。平成25年度は6名となった。平成26年度は東京のアンテナショップに窓口を開設し常駐している。大阪では月に1回、金・土に出張相談をしている。27年度には、東京の交通会館の中のふるさと回帰支援センターにも常駐し、現在9名体制で活動中。

相談者は、平成23年度に129組241人、27年度は目標500組に対して518組864人、31年度の目標は1,000組となっている。相談者は、30歳、40歳が多い。3.11の震災以降、関西からの移住者が増えた。情報発信にはインターネット「高知で暮らす」を使っていて、東京・大阪での新・農業人フェアや農林漁業の相談会にも参加、移住交流会やツアーなどのイベントを開催している。東京・大阪で相談した方に高知に来てもらうにはアグリスクールは本当に良い企画。



## 「高知県立農業担い手育成センターの受け入れ体制強化について」

高知県立農業担い手育成センター 矢野チーフ

今年度新しい取り組みを始めた。長期研修の方は雇用就農、独立就農など様々な形態がある。「主役は研修生、目的は就農」を合言葉に取り組んでいる。直近3年間では県内・県外出身者は半分半分で最近県内出身者が少し増えている。26年度50%、27年度67%、28年度76%で年齢は40歳未満の方が多い。進路変更した方もいるが、75%の方が就農に向けて頑張っている。

今年度は、産地、地域との連携を強化して青年就農給付金（準備型）給付対象の施設となっている。就農希望者の長期研修に関する確認の処理を入校当初から整えておいて、途中からでも給付が受けられるというような形をとっている。

4月から産地と研修生とマッチングに向けて、各市町村の担当者の方に産地提案書を持ってもらいプレゼンをしてもらっている。5月26日は3市町村、8月3日には室戸市、奈半利町、田野町、芸西村、JA土佐市からプレゼンに来ていただいた。その他、長期研修生に産地のPRをしたい市町村の方に連絡して頂ければセットをしたい。

研修生の出口の準備をしていく時にバタバタして安心して就農できなかったケースがあった。そのようなことがないように関係機関が十分に支援を行えるようにしたい。

アグリ体験合宿を開催しているが、その中で産地視察も行って長期研修生にも参加してもらっているが、研修生にうちの産地にぜひ来てほしいとの要望があればぜひ手を挙げてもらいたい。

今年、5月に長期研修生用の宿泊施設が完成した。（全20室）

アグリスクールも開催しているので（東京、大阪）、ご近所の方でそのような方がいれば紹介をしていただきたい。

## 新規就農者の近況報告



### ◇越知史雄さん（高知市春野、施設キュウリ）

新規就農して1年が終わったところですが、この1年を振り返って自分なりに5段階で評価してみると大体Cくらいかなと思います。上から3番目で少し自分に甘いかなとも思いますが、キュウリなので1日も休みなしに働いてきたのでそれも加味してこれくらいにしてみました。この1年間やってきてうまくできなかったことの課題がありますのでそれをご紹介しますと、管理の手順、水の管理で土壌の状態をよく把握できなかったので収量があまり増えなかったということと、病気に関してもやはり先手を打てなかったこと、施肥の与え方もわかりませんでした。来年はこの1年のうまくできなかったことを1つ1つ検証してそれに対応した解決策をみつけたプランを立ててやっていこうと思っています。

来年の目標は売上ベースで114%のアップを目指してやっていきたい。その根拠となるものは、毎年2月頃までの前半は比較的高値で推移していて3月以降は約半分位の単価となるので前半にいかに多く収穫するかを考えてやっていきたいです。



### ◇中城光規さん（須崎市、施設ニラ）

工業高校で就学時、土日の学校が休みの時を利用して県内の法人が経営していたナスのハウスで、収穫や袋詰め作業を行っていたが、その法人がハウス経営をやめてしまったので、アルバイトも終わってしまいました。その後、その法人が仁淀川町で40aのミニト



マトを栽培していて、法人の担当者より今度中土佐町でミニトマト栽培を始めるので管理者として入社しないかと誘っていただきました。当時、就職先を探していたので、雇用就農は私の選択肢の中にはありませんでしたが農業に関心がないわけではなかったので入社させていただきました。最初は、仁淀川町のハウスでミニトマト栽培を研修してから中土佐町の中古ハウスでの栽培準備を行いました。ハウスは、15aで10年近く放置されていて修復や片付け、定植の準備を行いパートも雇い栽培を始めました。翌年は、隣の中古ハウス17aも同じように修復し合計32aでの栽培となりました。ハウスの栽培管理や、パートさんの労務管理などを行っているうちに、独立就農をしてみたい気持ちが強くなり新規就農を決意しました。

就農地は、実家の近くに6年ほど前に農地の集積事業で農地の集積が終わっていた農地を父親から借り受け最初は4aの露地ニラから始め、2年目は20aのレンタルハウスを建てニラ栽培をしましたが、始めたころは農業資材購入費の支払いや、栽培がうまくいかなかったりして後悔したこともあったが、3年目には黒字となりました。

#### ◇林智章さん（南国市、施設シトウ）

雇用就農で（株）トマトの村で2年間務めた経験があります。今は南国市長岡地区でシトウを栽培していて、就農して3年目が終わったところです。

今日は、JA長岡青壮年部の紹介をしたいと思います。青壮年部にはU・Iターンの方が多く加入していますが、みんな仲良く融合している感じで活動をしています。私も、いい環境で農業ができていますと実感しています。どこで何を作るのかが大変重要なことかなと感じております。今年、初めて環境整備の会長や、南国市の環境制御の会長もさせてもらっています。会長をやって行く上で大事なことは、人とのコミュニケーションをとり人の考え方をよく聞くことが大切だと思います。

今年は、昨年の経験をもとにPDCAを繰り返し前向きに行動したいと思います。

#### ◇森田修平さん（土佐市、文旦）

今日は、就農後の課題で技術の向上や収益向上について話したいと思います。

私が就農したのは、祖父が亡くなったため農業を継ぐことになり5年が経ちました。最初は、祖父が亡くなってしまったため、栽培について何一つわからないのでいろいろな文旦農家に聞きに行きましたが、人によって栽培のやり方が全く違うので、どれが正解かわからず、どのやり方を取り入れてやろうかなと1年目は苦勞しました。良いもの（文旦）を作るにはどうしたらよいか考えてJAの指導員の方や県の改良普及所の指導員さんに聞いたり、本を見て勉強しました。本は高価なものが多く、アマゾンで本を調べてチェックして地元の図書館に予約して借りて勉強しました。また、土づくりが大切で肥料の本もよく見ました。

2年目は地元の品評会で受賞できて、少しは技術の向上になっているのかなと思っています。

ますが、まだまだ上を目指していて、県知事賞や農林水産大臣賞をもらえるように頑張っていきたいと思っています。収益の向上については、販路を広げるために、タウンページやインターネットでフルーツの販売店などを検索して電話をかけましたがなかなか取り合ってもらえませんでした。100件電話して10件くらいは取り合ってもらえて、その内3件くらいは試してみてくださいとところもあり徐々に販路を拡大していきました。それと、規格外の文旦は既存の販路では出せなくて処分するのですが、産直市に出したり、市場の仲買さんに買ってくれるよう相談したりして販売の向上につなげています。普通の年間収量は4 tですが、6～7 t位までにしたいと考えています。



#### ◇篠田新生さん（四万十市西土佐、施設米ナス）

金沢市からUターンしてきて今年で4年目。西土佐農業公社で2年間研修を受けた後、春秋作の米ナスの雨よけ栽培を始めたまし。ちょうどその年は、西土佐で最高41°が観測された年で、脱水症状で病院に運ばれたこともありました。その暑さ対策として、メガブルーという被覆資材を取り入れたので暑さがだいぶ緩和されました。1年目は失敗に終わりましたが、2年目はその失敗を糧に雨よけ米ナスで収量が県下1位、秀品率97%という結果になり自分でも信じられない数字となりました。3年目はさらに改良してやってみましたがやはり失敗してしまいました。しかし、県下の平均収量でしたので失敗とは言えないかもしれません。4年目となる今年は、高齢者が多いのでそのために雇用を作りたいと思い、思い切って作型を変えて露地のナバナ、ブロッコリーを始めました。私は、チャレンジをするのが好きで、徳島県でやっていたセルトレイに種子を蒔くという、人と違ったやり方で栽培しましたが、見事に失敗しました。しかし、平均収量でしたので失敗といえるかわかりませんが、今後もチャレンジを続けていきたいと思っています。あと1年で給付金が終わるのでもう少し新しいことにチャレンジして、皆様に結果を伝えたいと思います。



### ◇濱口佳裕さん（安芸市、施設ナス）

私はもともと色白な体質ですが、見てのとおりよく日焼けしています。仕事を真面目にしてこんなになったわけではありません。趣味のロードレース、トライアスロン、最近始めたゴルフのせいです。将来はパラグライダーをやる予定です。大阪から高知県にIターンしたのは坂本龍馬が好きで、30歳くらいの時に上司に「退職して高知に移住する」と相談したら、仕事を辞めて高知に行っても生活はできんと言われやむなく断念しました。しかし、48歳の時に思い切って退職届を出し、私だけ高知に移住しました。私が移住した時は移住者でしたが、今は定住者で、妻と子供が大阪に出稼ぎに行っているようになりました。高知に移住して安芸農業振興センターの1年契約の臨時職員に採用してもらいました。最初は、高知に移住し副業でライダーハウスの宿をやり正業で何かの仕事をしたいと思ったのですが、振興センターに採用になってナスの栽培に関心を持ち、ナスを栽培するようになりました。2年目に竜巻でハウスと小屋が全壊した時、振興センターの所長さんの指示で、職員の方がたくさん片付けの応援に来てくれ、公務員は個人のそのような手伝いには来てくれないものと思っていたので驚きましたが、一人でやれば1週間～3週間かかるところ、半日ほどで片付け終わることができました。幸い別のハウスが見つかり栽培することができました。その後、私が体調を崩し、1週間ほど入院した時、管理と収穫ができなくてナスは肥大し本当に困ったことがありましたので、新規就農者の組合を立上げ、今は20名位がナスの植付時や不意の事故などがあつた時は無償で助け合っています。

私は、県外から新規就農した方の手助けをしたいと考え農業の塾を立ち上げました。今年2名の研修生が塾生となっています。研修生の目標は年間15tですが、16tを収穫できるように指導したいと思っています。

今の夢は、農業担い手育成センターでプレゼンをしたいと思っていますので、ナスの収穫を休んでも行きますのでよろしくをお願いします。



### ◇吉田明さん（四万十町、水稻、ショウガ、有機野菜）

私は、15年ほど前に新しいなかビジネススクールを受講して10年位たってから農業会議に話を聞きに行き、新農業人フェアに行き、アグリスクールを受講することになって、農業体験塾に参加し、担い手育成センターで長期研修生となりました。移住に関しては、移住・交流コンシェルジュの安岡さんにお世話になりました。高知県が用意しているフルセットのメニューで就農しました。それから、4年間就農して、ショウガを栽培していましたが、農地がなく困っていたところ、担い手育成センターより四万十町で窪川の駅から4kmと近いところで、農地が30aついた貸家があるとの情報を頂きお世話になりました。そこは、20歳代の方が一人いますが、ほとんどの方が70歳代の限界集落でした。就農1年目は30aを田んぼと畑に分けて、研修生でお世話になった農家さんより20aの畑を貸してもらってショウガを始めました。当時は、生活のためにショウガの研修先の農家に手伝いにも行って日当をもらいながら、農業をしていました。そのころに、長老の方が、集落営農組合で管理している110aの田んぼをやらないかと相談があり、組合に入ったら機械も使ってよいとのことで、管理をすることになりました。それで、2年目は、水稻120a、ショウガ30a、有機栽培の野菜を20a、何とか農業収入と農業支出が同じ位となりましたが、生活費は貯金を取り崩していました。その時にその集落営農集落組合の代表者の方が病気になり、農業ができなくなり100aの農地と組合の代表者を引き受けることになりました。3年目は管理する農地が250a位になりました。4年目は、収益率を考え、ショウガを減らして、有機栽培の野菜を増やしました。有機栽培をやるには販路がないと難しいのですが、四万十町には有機野菜を売っていこうとしている法人がありその法人と一緒に販売をしていくことにしています。



#### ◇田畑勇太さん（大豊町、施設有機ミニトマト）

私は、高知大学卒業後「有機のがっこう」で1年間研修後、ミニトマト農家で1年間研修した後就農しました。就農した集落は住民全体で70人位しかいなくて1日に合うのは2～3人位です。高知県に来て7年いますがいまだに方言がわからない時があります。就農先は山間地ですので、農地が狭くどれだけ小さな面積で収益を上げるのか、又はどれだけ経費を抑えるのかが勝負かなと思います。去年1年間やってきましたが、まだまだ分からない事があり、1年の中で改善しようとしたが改悪だったりしてうまくいかない思いながら妻と二人で収穫しています。現在3年目。地区で聞き取りをしてみて、今後10年後か15年後は住民が5～6人になるのが、この地域が好きなので農業で生計を立てていくことも大事ですが、新しい人が住みやすい環境を作って住民を増やすことが大切になってくると思います。農業に関しては、高知市の日曜市、農協、サンシャインの直販に出しているが、日曜市では、お客さんと直に話ができるので、おいしいトマトを作らないと味が落ちたなど言われるので、いかに喜んでもらえるようなトマトを作れるように努力していきたいと思っています。



#### ◇品原伸さん（仁淀川町、お茶）

私は、高知市出身で、大学ではお寺等の建築の勉強をしていましたが、卒業後、妻が仁淀川町で小さな商売をしていたので、手伝っていましたが田舎の商売で時間があつたので、池川茶業組合の事務職として就職しました。その後、自分でもお茶を栽培したい思いが高まり、翌年、山中忠一さんのところで「農の雇用事業」を活用し2年間お茶の勉強をした



後、60aの農地でお茶農家として就農しました。就農と同時に池川茶業組合の組合長に就任しました。今、お茶農家は専業、兼業併せて7軒あり20haですが、30haまで増やしたいと考えています。なぜ若い自分が組合長になったのかは、私を除く農家の方の平均年齢が79歳と高齢で、新しい風を吹き込む意味もあったのではないかと思います。しかし、今後10年したら組合員は私だけになるのではないかと心配しています。今はお茶農家を増やすことが重要と思い、今年農の雇用を活用して1名女性を採用しました。